もうひとつの忠臣蔵

吉良上野介義央公の実像

―其の二

西尾市文化財保護委員長
吉良公史跡保存会会長
颯田洪

吉良上野介義央公の本当の人物像は、現代のパワハラ問題の根幹につながることも多くあります。

本誌では、吉良公史跡保存会の颯田洪会長が執筆くださいました原稿を、3回にわたり掲載いたします。今月はその2回目です。

義央は十七歳で高家となります。高家とは、江戸幕府の職の一つで、老中の支配に属し、勅使・院使、門跡、法親王の饗応や饗応係大名の指揮、習礼の教授、朝廷の重要儀式に将軍の使者として参列や儀式の礼法の指南をする役職であります。

義央は二十三歳のとき、後西天皇のご譲位と霊元天皇の即位の大行事を務めます。また、ご退位された後西上皇から御製の和歌、それも歌中に「吉良」の文字を詠み込んだものが下賜されており、皇族の信頼の深いことを物語っています。

私生活では、三姫の兄上杉綱勝が急逝し上杉家断絶の危機を迎えますが、綱勝の岳父保科正之の特別な計らいで義央の長男が上杉家の養子となり四代藩主綱憲となります。義央は二男四女を授かりましたが、次男三郎が八歳で他界したため、吉良家の後継者に綱憲の次男春千代を養子に迎えました。のちの義周です。

義央は、武闘派ではありません。資料から明らかになったのは、はっきりものを言う傾向は見られるものの、実直で忠実な行政官僚であり、朝廷と幕府の間を優れた手腕でまとめ、政治的問題に容喙するようになったと思われます。

義央は領民には寛容であり、領地の黄金堤の築堤は隣接の西尾藩主を説得し、水害から領民を守る土木工事であり、恩恵を一番受けた甘縄藩の領民も大喜びであったそうです。

土木工事には精通しており、農地の整備工事を進んで実行し、領民の暮らしに気を配っていたといわれています。また、河川の改良工事にも関心を持っておられました。晩年には、富好新田の開発など善政を施してこられました。

江戸での義央は、高家として将軍綱吉宣下の御礼の副使として上京するのをはじめ、年頭御使六回、臨時の御使九回、日光東照宮十二回、伊勢神宮三回の代参を務めています。

元禄十四年一月十一日、義央は幕府から京都への年頭御使を命じられ、同日に江戸を出発し、二十六日入京します。二十八日には参内し、将軍綱吉からの挨拶を伝えました。将軍からの挨拶に対する答礼として、勅使に柳原資廉と高野保春が任命されました。

二月四日に勅使饗応役（御馳走人）に赤穂藩主浅野長矩が命じられ、義央も二月二十九日に江戸にもどります。そして、三月十四日は、将軍が天皇の使者にお礼を伝える重要な日であります。

勅使への挨拶の時刻が早まったことの確認を梶川頼照が松の廊下で一言二言したときに義央の背後から「この間の遺恨覚えたるか」と声をかけ切りつけたのは、浅野長矩でありました。勅使柳原資廉の「道中記」には、「馳走人浅野内匠、乱気狂、次ノ廊下ニテ吉良上野介ヲキル、大ニ騒動絶後言語也」と記しています。まさに大騒動で、勅使にお応えするのは心苦しいと幕府から申し入れました。

（つづく）

イラスト・木村武司